

# K 国 語 問 題

## 注 意

- 一 試験開始の指示があるまでこの問題冊子を開いてはいけません。
- 二 解答用紙はすべてHBの黒鉛筆またはHBの黒のシャープペンシルで記入することになっていました。HBの黒鉛筆・消しゴムを忘れた人は監督に申し出てください。  
(万年筆・ボールペン・サインペンなどを使用してはいけません。)
- 三 この問題冊子は16ページまでとなっています。試験開始後、ただちにページ数を確認してください。なお、問題番号は一〜三となっています。
- 四 解答用紙にはすでに受験番号が記入されていますので、出席票の受験番号が、あなたの受験票の番号であるかどうかを確認し、出席票の氏名欄に氏名のみを記入してください。なお、出席票は切り離さないでください。
- 五 解答は解答用紙の指定された解答欄に記入し、その他の部分には何も書いてはいけません。
- 六 解答用紙を折り曲げたり、破ったり、傷つけたりしないように注意してください。
- 七 この問題冊子は持ち帰ってください。

### マーク・センス法についての注意

マーク・センス法とは、鉛筆でマークした部分を機械が直接よみとって採点する方法です。

- 一 マークは、左記の記入例のようにHBの黒鉛筆で枠の中をぬり残さず濃くぬりつぶしてください。
- 二 一つのマーク欄には一つしかマークしてはいけません。
- 三 訂正する場合は消しゴムでよく消し、消しすぎはきれいに取り除いてください。

マーク例

①	1	2	3	4	5
○	○	●	○	○	○

(3と解答する場合)

一 左の文章を読んで後の設問に答えよ。(解答はすべて解答用紙に書くこと)

資質によつてか、運命によつて、あるいは偶然によつてか、他のもつと不可解な理由によつて、あるいは考えつくした末の選択によつてか、自己の属する社会になじめないだけでなく、ほとんどこれと敵対するまでに異質な感性や思考をつちかつてしまう人間たちがいて、彼らはその社会に対する敵意を、〈歴史〉に対する拒否として表明することがある。自己を生み形成し、自分の欲望や精神や言語、あるいは身体さえもつちかつたものに対して自己を異質と感ずる。幸いにして処刑や監禁、追放のウキ目にあわなければ、彼はみずからの属する社会が〈歴史的变化〉をとげるための何らかの触媒になり、その社会への強い異和感を創造的な機会に変えることができるかもしれない。

一つの社会が、その中の異質な分子によつて突然変異をとげ、たえず変化し、また変化自体を進歩や進化とみなす。放蕩息子や、贖罪の山羊や、裏切り者、あるいは亡命者のような存在が、結局は一つの集団を衰退や停滞や破滅から救うことになる。歴史をもつほどの社会は、必ずこのような否定的要素を肯定に変える危ういドラマを含み、このようなドラマをめぐつて歴史を生み、歴史をしろし、次々書き改める。どんな異分子さえも、自己のなかに取り込み、より複雑でより柔軟なシステムとなつたこのような〈社会体〉に、それでも居場所を見出せず、また見出したくないものは、この社会に反逆するだけでなく、この社会の〈歴史〉に敵意をむけざるをえない。

たしかに、<sup>(1)</sup>〈歴史〉への敵対や批判さえも〈歴史〉をもつ社会に固有の現象であり、それがまた〈歴史〉の展開の一要素になつていくかもしれない。あるいはまた〈歴史〉の批判は、場合によつては、ほとんど修復が不可能なほど、その歴史との断絶として生きられるしかなく、一つの社会体のなかに決して彌縫しきれない裂け目や穴やカオスを刻むかもしれない。

一つの物を孤立させ、そのなかにそれ独自の、唯一の意味を流れこませるこの能力は、見る者が歴史を廃止することによってだけ可能になる。あらゆる歴史から身をはぎとるためには例外的な努力が必要である。

(注<sup>1</sup>)  
(ジャン・ジュネ『アルベルト・ジャコメッティのアトリエ』)

歴史がなんらか過剰になると生は崩壊し退化し、最後にはまたこの退化を通して歴史そのものも退化することになる。(注<sup>2</sup>)  
(ニーチェ『反時代的考察』小倉志祥訳)

このいかにも断定的で、ほとんど歴史的なものの全体にむけられた厳しい弾劾<sup>(a)</sup>は、いったい歴史における何にむけられているのか、このとき一体「歴史」という言葉によって何が意味されているのか。正しい歴史と誤った歴史、良い歴史と悪い歴史があるのではなく、歴史そのものが、ここではほとんど有害な何かとみなされている。このとき歴史とは、過去の〈出来事〉の総体をさすのか、それとも出来事の〈記憶〉をさすのか、あるいはそれらの出来事を記録した〈文書〉をさすのか。中島敦<sup>(注<sup>3</sup>)</sup>は、歴史に題材をとったあのユニークな短編小説で、まさに歴史とは何かという問い自体を作品に結晶させたのだった。「歴史とは、昔、在った事柄をいうのであろうか？ それとも、粘土板の文字をいうのであろうか？」(「文字禍」)

ジュネやニーチェにとつて、歴史が忌まわしいものであるのは、いったいなぜなのか。ニーチェはこの文で、歴史が過剰になると、歴史そのものが退化することになると、逆説めいた論理を述べている。歴史は過剰であつてはならないが、まったく不在であつてもならない、歴史が健全であるための均衡点が存在する、といたいように。ニーチェが批判しているのは、歴史の過剰であつて歴史そのものではない。しかし歴史が過剰になることは、おそらく歴史の本性なのだ。だからこそ歴史が批判されなければならなかった。ジュネの方は、まさに歴史に批判を向け、一つの存在がそれに固有の唯一の意味を獲得するには、歴史から離脱しなくてはならないという。

(2) 歴史は、個別的な実存の代替不可能な唯一性（孤独）を、何度も反復されてきた同じ役割や、同じ意味のなかに位置つけてしまう。歴史は、あなたが誰であるかを教え、何かであることを強い、過去をつらぬき打ち立てられた意味のレンサのなかに、あなたを閉じ込めてしまう。歴史的な栄光を浴びるのは、何かしら恥ずかしいようなことだ。そのときあなたは、すでに歴史によって定義され、歴史によって意味を与えられ、歴史によって存在している。確かに歴史から排除されることを恥辱と感ずる人間がいる一方で、歴史に関与し、歴史とケッタクし、癒着することを恥辱と感ずる人間がいる。歴史が与える意味にどうしても異和を覚え、むしろ無意味でありたいと願う生き方さえある。

歴史に対するこのような問いや批判そのものが、すでに歴史を前提し、歴史的な社会の中で問われているのは確かだ。一つの存在の固有性が、十全に感受され、実現され、完遂されなければならないという要求は、これに對比される別の固有性があること、過去に生きた他者やこれからやってくる他者もまた別の固有性をもって存在することを前提としている。歴史を弾劾する思考は、決して歴史から無垢である立場を予定しているわけではない。しばしばそれは、公に、あるいは大多数によって歴史とみなされているとは異なる、もうひとつの歴史を求めている。それをやはり歴史とよぶかどうかは、確かに用語の問題にすぎないと言える。

別の歴史にせよ、それもまた歴史ではないか。歴史とは、つねに別の歴史を要請し、別の歴史を生み出すような弁証法そのものではないか。そうも言える。けれども、一足飛びに、すべてを歴史のなかに統合してしまうのではなく、歴史に対して弾劾を向け、歴史と断絶しようとする思考のなかに、どんな振動やどんな実験が含まれているのか、それに眼をむけてみることにしよう。(4) 歴史に脳も身体もひたしながら、決して歴史に溶けてしまおうとはしない存在の隠れた部分を測ってみようと思うのだ。

（宇野邦一『反歴史論』による）

(注) 1 ジャン・ジュネー——フランスの小説家、詩人、劇作家（一九一〇—一九八六）。

2 ニーチェ——ドイツの哲学者（一八四四—一九〇〇）。

3 中島敦——日本の小説家（一九〇九—一九四二）。

## 問

(A) 線部(イ)～(ロ)を漢字に改めよ。(ただし、楷書<sup>かいしよ</sup>で記すこと)

(B) 線部(a)～(c)の読みを、平仮名・現代仮名遣いで記せ。

(C) 線部(1)について。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 創造性を発揮する異分子は、社会から追放されるまでの間に、その歴史に存在しない新しいアイデアを生み出す、ということ。

2 社会は、進歩すればするほど異分子を取り込んで柔軟性を増すため、批判が減少しその歴史も安定的になる、ということ。

3 歴史には否定的要素を肯定に変える危ういドラマも含まれ、それもまたその社会の歴史を作る、ということ。

4 社会に居場所を見出せない者は、その歴史に敵意を向けざるをえず、紛争の多い歴史をもたらす、ということ。

5 社会の歴史が進むほど異分子が増え、ジャン・ジュネやニーチェのような歴史を弾劾する思想家が増加する、ということ。

(D) 線部(2)について。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 人間は本来孤独な唯一の存在であるべきにもかかわらず、同じことを繰り返す歴史の記録者であること。

2 固有の役割や意味を持つているはずの存在を、歴史的に幾度も出現したドラマになぞらえて、理解してしまふこと。

3 歴史上の出来事を基準として榮譽をあたえられるのは、独創的な人にとって単に過去を再現しただけという屈辱に過ぎないこと。

4 歴史があたえる役割から解放され、独自の生き方を貫きたいという人は、いつの時代にも多数いたこと。

5 自らは独自に行動していると考えていても、結局歴史上の人物や出来事と同じことをしているに過ぎないこと。

(E) ——線部(3)について。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 歴史的な社会の外で、本来の固有性そのままに生きている存在に関する記録。

2 同時代、過去、未来の他者とは区別される、超越的な存在に関する記録。

3 過去の記憶と固く結びつき、そこからは分離することができなくなった記録。

4 公の歴史とは区別される、一個人の完遂された固有の生き方に関する記録。

5 大多数によって認められている歴史とは異なる、亡命者の側の記録。

(F) ——線部(4)について。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 歴史に名を残す業績を挙げたため、社会の記録から消えることがない人たち。

2 誤った歴史を正そうとして、歴史とは何かを深く考察しようとした人たち。

3 歴史にあまりに深く関わり過ぎたことに異和感を覚え、なるべく関わらないようにしている人たち。

4 歴史の研究に取り組みつつも、目立った業績をあげることの出来ない人たち。

5 歴史の一部として時代を生きながらも、歴史に迎合することなく自らの固有の意味を探し求める人たち。

(G) 次の各項について、本文の内容と合致するものを1、合致しないものを2として、それぞれ番号で答えよ。

イ 生まれ育った社会に対して自らを異質と感ずる者は、実は独創的でありその社会に親和的な人間である。

- ロ 歴史が過去の出来事自体かその記録であるかという問いは、文学作品の題材になるほど重要な問題である。
- ハ ジュネは、一つの存在が持っている固有の意義を歴史が喪失させてしまうことがあると主張した。
- ニ ニーチェは歴史が過剰になることを批判したが、過剰になることは歴史の本性である。
- ホ 歴史から何かを学ぶためには、まず公の歴史を疑うことから始めなければならない。

二 左の文章を読んで後の設問に答えよ。(解答はすべて解答用紙に書くこと)

正しいかどうかについて多くの人が気にするものの一つに敬語表現がある。相手に食べるように勧めて「いた  
だいてください」と言ったら、誤りだろうか。「いただきてくたさいは誤り」で、「召し上がってくださいと言わ  
なければならぬ」とするのが模範解答だろう。では、「いただきてくたさい」は日本語の敬語としてはまったく  
の誤りで使つてはいけないものなのだろうか。

「いただく」は謙讓語で、動作主のへりくだりを表す。「召し上がる」は尊敬語で、動作主に対する敬意を表す。  
説明されなくてもそんなことはとうにご存じかもしれない。近年の国語教育では少しずつ変わってきているが、  
敬語を尊敬語と謙讓語の対に丁寧語を加えて説明することは今でも行われている。これに、美化語や丁寧語を加  
えることもあるが、国語教育や文法教育における敬語の扱いは、ここ数十年大きく変わつてはならず、マイナー  
チェンジがある程度である。

実は、さきほどの「いただく」に関する模範解答は、表向きの模範解答ではあるが、常に成り立つ万能の答え  
ではない。というのも、たいていの「いただく」は謙讓語だが、謙讓語でない場合もあるのである。例えば、「新  
茶の季節になりましたね。今週は毎朝食後に新茶をいただきます」と言うとき、自分でお茶を買い、自分の  
飲むお茶を自分で入れているのであれば、へりくだつて敬意を表す相手が存在しない。よつて、これは厳密な意  
味での謙讓語ではない。つまり、「いただく」には、謙讓語としての用法と厳密な謙讓語から逸脱する用法が存在  
するわけである。だから、謙讓語でない「いただく」の場合は、さきほど模範解答と称した説明も、模範解答も  
どぎでしかなく、<sup>(1)</sup>謙讓語であることを根拠に「間違い」というレッテルを貼るのは、ある意味で、冤罪えんざいのよう  
なものである。

すべての苺が甘いとは言えないように、すべての「いただく」が謙讓語だとは言えない。甘い苺でもさらに甘  
い生クリームと一緒に食べると酸味を感じることがあるように、謙讓語も相対的に謙讓の度合いが強くと明確であ



ることもあるが、一方で、比較する表現によってはそれほど謙讓性が感じられないこともある。「へりくだっている」かどうかをデジタルに判定できるほど単純ではないのだ。また、昔の苺と今の苺が違うように、時代によってもことばの感じ方は異なる。ただか三十年代か四十年代で文法が変わるのかと疑問に思う人があるかもしれないが、まったく別のものにすっかり変わることは考えにくいものの、新しい用法が広がったり、他の表現との力ね合いで頻度が変わったりすることは十分あり得る。

もちろん、「いただく」がたいていの場合謙讓語であることは事実だが、実際に謙讓用法に使われているかどうかを見ずに決めつけることはできない。それなのに、「いただく」謙讓語」と断定してしまうのは、<sup>(2)</sup>過剰な一般化であり、単純化である。確かに、規則や情報は単純なほうが覚えやすく、また、適用範囲が広いほど楽ができる。しかし、単純化や一般化は度が過ぎると、ただおおよそで雑な扱いになり、細かな判断をしないまま怠惰な対応になってしまう。過剰な一般化の背景には、教育上の問題もあるが、ことばの規範に関する考え方もある。また、言語現象の複雑さもあり、その隙を突く妙なロジックに人が簡単に説得されてしまうことも深く関わっている。

文法を、法律の条文のように、ことばで示すことができる「規則」にする単純化はわかりやすいが、ときに思わぬ危険を招くことがある。例えば、「全然大丈夫です」のように肯定文の強調として「全然」を用いる言い方をしている人があると、「最近の若者は、全然を肯定で使っている。全然は、全然しらない、と否定文で使うのが正しい」と言つて、顔をしかめる向きがある。ここには新しいことばづかいへの嫌悪があるのは事実だとしても、いくつかの誤解が含まれている。

まず「全然」を肯定文で使う例は江戸時代から見られ、近代になってからもそれほど珍しくはない。夏目漱石の『坊っちゃん』では、主人公が「一体生徒が全然悪いです」と言う場面が出てくる。「全然」は、江戸時代に口語体中国語で書かれた白話小説の影響で使われ始めたというが、戦前の小説などでは「すっかり」「まったく」というふりがなをつけて使うことも多かった。永井荷風の『つゆのあとさき』には、「これまで考えていた女性観の

全然誤っていた事を知って」という表現が出てくる。

実態としては、肯定文でも使われているのに、否定と呼応させて使うという「迷信」が「全然」に付与されたのはなぜだろうか。明治後半から終戦くらいまで、おおむね二十世紀前半は、文法教育が確立していく時代でもあった。例えば、英文法なら、「at all」は否定文で用いて否定を強める、「ドイツ語なら「gar は nicht の直前に置き、否定を強める」のように、否定の呼応規則として教授することも多かった。日本語でも、同じような文法規則があると想定されるようになり、at all や gar の訳語に使うことも多かった「全然」に否定呼応規則のイメージが染み込んでいったと考えられる。

実は、at all や gar も否定でのみ使うわけではないのだが、規則は単純なほうが教えやすく、習得しやすい。強調の副詞は他にもたくさんあるから、「全然」が否定文でしか使えなくなっても、現実に困ることはまずないわけである。ここで興味深いのは、現実のことばの使用から抽出するはずの文法規則が、いつのまにか主客転倒して、文法規則に合うように現実のことばの使用が制限されるようになってしまったことである。

なお、最近の国語辞典の多くは、「全然」は否定文でのみ使うという誤解を解くための補足を載せている。国語辞典など新しくなっても大差がないと言う人がいるが、ことばの変化に合わせた更新を除いても、新しい知識や知見、新しい説明などが加わり、辞書は新しいほどよくなっていくのである。面白いのは、最近の「全然」が否定の想定を打ち消す配慮の機能を持っている点である。若者から広まる新しいことばは、知らないことや誤解から生じる場合もあるが、むしろ新しい配慮のかたちの現れであることも少なくない。

例えば、「全然おいしい」などは、最初から誰もがおいしいとわかっている場合には使わないのが普通である。「新しくできたーってレストランがおいしいって評判だから、<sup>(b)</sup> サッソク食べに行っただんですが、やっぱり、すごくおいしくて感動してしまいましたよ」と言うときに、「すごく」の代わりに「全然」を使う人はまずいないだろう。一方で、「私がつくったんですが、おいしくないでしょ?」と言いながらすすめられたものを味見しているなら、「全然おいしいですよ」はうまく合致する。誰かが「おいしくない」と思っている状況で、それを打ち消して

「全然おいしい」と相手に配慮するのが、さきほど述べた「否定の想定を打ち消す配慮」にあたる。

こういう使い方が、ことばの微妙な解釈への感受性が強い若年層から始まることはあるから、<sup>よわい</sup>年齢と経験を重ねた気になって年長者が深く考えずに若者に小言を言うのは考え直したほうがいいと、私も日々自戒をしているところである。コンビニで飲み物を買ったときに「ストローをおつけしますか」と聞かれ、「a」ではなく「b」と答えるのは、「ストローがないと困るのではないか」という配慮に対して、なくても困らないと否定の想定を打ち消しながら、問題がないことを配慮しつつ言う」ことなのだという（呉泰均氏の研究による）。<sup>い</sup>齡を重ねてブスイな中高年になって来ると、そんなに配慮し合う必要があるのかと思わないでもないが、配慮そのものは美徳だから、少なくとも小言は控えなければなるまい。

（加藤重広『日本人も悩む日本語』による）

## 問

(A) 線部(イ)の<sup>い</sup>を漢字に改めよ。(ただし、<sup>かじしよ</sup>楷書で記すこと)

線部(イ)については、問題文中に不適切な表記があつたため、全員正解とすると大学から公表されています

(B) 線部について。その意味として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 方向      2 志向      3 意向      4 偏向      5 傾向

(C) 線部(1)について。その理由として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 本来は謙譲語としての用法しかないのに、<sup>い</sup>が密な謙譲語ではない用法が恣意的に生み出されているため。
- 2 <sup>い</sup>が密な謙譲語ではない用法があるのに、それが誤りであるかのような判断が広まってしまっているため。
- 3 動作主がへりくだった用法は、あたかも、すべて謙譲語であるかのように捉えられてしまっているため。
- 4 謙譲語であるとも謙譲語でないともとれる用法なのに、謙譲語だという決めつけが一般化しているため。
- 5 <sup>い</sup>が密には謙譲語とはいえない用法も模範解答に含め、それ以外は間違いと判断されてしまっているため。

(D) 線部(2)について。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 一部の者しか知らないことを、あたかも誰もが知っている常識であるかのように想定すること。
- 2 すべての事例に妥当するとは限らないことを、あたかもすべてに妥当するかのように想定すること。
- 3 厳密にはそれぞれ異なっている事柄を、あたかも差異がないかのように想定すること。
- 4 どこにでもあるようなありふれた状況を、あたかも極端な事例であるかのように想定すること。
- 5 いまだ広く賛同を得られていない意見を、あたかも多数の意見であるかのように想定すること。

(E) 線部(3)について。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 本来、「全然」の実際の使われ方に合わせて文法規則を変更すべきなのに、否定呼応規則に基づいて「全然」が使用されるべきものとされている。
- 2 もともと強調の副詞は「全然」以外にもたくさんあったにもかかわらず、現在では、それらは否定の呼応としてしか用いられなくなってしまっている。
- 3 文法的には、「全然」を否定の呼応として使用するのは誤りであるはずなのに、それを否定の呼応で使うべきであるという「迷信」ができあがっている。
- 4 *at all* や *or* も否定でのみ使うわけではないのにもかかわらず、あたかも否定でしか使えないかのように文法で規定してしまっている。

5 *at all* や *or* の用法の類推から「全然」を否定文で使うようになったのに、「全然」の影響で *at all* や *or* も肯定文で使われるようになった。

(F) 空欄 [ a ] ・ [ b ] に入る表現の組み合わせとして最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 a 全然ありません      b 大丈夫です
- 2 a 全然問題ありません      b 全然ありません

3 a 全然大丈夫です b ありがとうございます

4 a 要りません b 全然大丈夫です

5 a いただきます b 全然問題ありません

(G) 次の各項について、本文の内容と合致するものを1、合致しないものを2として、それぞれ番号で答えよ。

イ ことばの変化に合わせた更新が行われているだけでなく、新しい知識や知見などが加わっているため、辞書は新しいほど時代を先取りした内容になっていく。

ロ 文法として正しいと思われる用法も、一般化・単純化することによって誤ったものになることもある。

ハ 「全然」を否定文で使う例がすでに江戸時代からあったため、明治後半以降に文法教育が確立されるなかで、*at all* や *gar* の訳語として使われるようになった。

ニ 近年の国語教育の最も大きな変化は、尊敬語と謙讓語と丁寧語をひとまとまりのものとして説明するようになったことである。

ホ 文法が、法律の条文のように、ことばで示すことができる「規則」として捉えられることがある。

三 左の文章は『紫式部日記』の一節で、藤原道長の娘彰子が若宮（のちの後一条天皇）を出産した五十日目の夜の祝宴（五十日の祝い）において、道長を始めとする親族・縁者が大いに盛り上がっている場面を描いたものである。これを読んで後の設問に答えよ。（解答はすべて解答题紙に書くこと）

おそろしかるべき夜の御酔ひなめりと見て、<sup>(1)</sup>ことはつるままに、宰相の君にいひあはせて、隠れなむとするに、東面に殿の君達、宰相の中将など入りて、さわがしければ、ふたり御帳のうしろに居かくれたるを、とりはらはせたまひて、ふたりながらとらへ据ゑさせたまへり。「和歌ひとつづつ仕うまつれ。さらば許さむ」とのたまはす。いとほしくおそろしければ聞こゆ。

いかにいかがかぞへやるべき八千歳のあまり久しき君が御代をば

「あはれ、仕うまつれるかな」と、ふたたびばかり誦せさせたまひて、いと疾うのたまはせたる、

あしたづのよはひしあらば君が代の千歳の数もかぞへとりてむ

さばかり酔ひたまへる御心地にも、おぼしけること<sup>(4)</sup>のさまなれば、いとあはれに、ことわりなり。げにかくもてはやしきこえたまふにこそは、よろづのかざりもまさらせたまふめれ。千代もあくまじき御行末の、数ならぬ心地にだに、思ひつづけらる。

「宮の御前、聞こしめすや。仕うまつれり」と、われぼめしたまひて、「宮の御父にてまろわろからず、まろがむすめにて宮わろくおはしませず。母もまた幸ひありと思ひて、笑ひたまふめり。よい男は持たりかし、と思ひたんめり」と、たはぶれきこえたまふも、こよなき御酔ひのまぎれなりと見ゆ。さることもなければ、さわがしき心地はしながら、めでたくのみ。聞きあさせたまふ殿の上、聞きにくしとおぼすにや、わたらせたまひぬるけしきなれば、「おくりせずとて、母うらみたまはむものぞ」とて、いそぎて御帳のうちを通らせたまふ。「宮なめしとおぼすらむ。親のあればこそ子もかしこけれ」と、うちつぶやきたまふを、人々笑ひきこゆ。

(注)

- 1 宰相の君——藤原道綱の娘、豊子。
- 2 殿の君達——頼通・教通など、道長の子息たち。
- 3 宰相の中將——道長の甥、藤原兼隆。
- 4 おぼしけることのおさまなれば——ずっと念願していらつしやうた通りの状況であるので。
- 5 宮——中宮である彰子。
- 6 母——道長の妻、彰子の母である倫子。
- 7 男——ここでは、夫の意。

## 問

(A) ——線部(1)の現代語訳として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 酔いが覚めると同時に
- 2 宴が終わるとすぐに
- 3 時が経つにつれて
- 4 酒がなくなり次第
- 5 任務を果たしたところで

(B) ——線部(2)は、直前に詠まれた和歌の巧みな掛詞の使用を高く評価する発言である。この和歌には、「あまり」〔八千歳の余あまり〕と副詞「あまり」を掛ける〕のほかに、もう一つ掛詞になっている語がある。それを文中から抜き出して答えよ。

(C) ——線部(3)の現代語訳として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 終わりが来るはずがない
- 2 満足できそうにない
- 3 困難に出会うはずがない
- 4 おろそかにできない
- 5 いつまでも続きそうにない

(D) ——線部(4)について。なぜ「われぼめ」をしたのか。その理由として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 自分が臣下として最高位にあるから
- 2 若宮の生母が自分の娘であるから
- 3 自分としては若宮をうまくあやしたから
- 4 自宅で立派に祝宴を催したから
- 5 自ら詠んだ和歌が上手だと思ったから

(E) ——— 線部(5)の解釈として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 それほど幸せでもないの

2 それほど乱暴な酔態もないの

3 それほどよい夫でもないの

4 それほど多くの座興もないの

5 それほど気まづくもないの

(F) ——— 線部(6)の「殿の上」とは誰のことか。最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 若宮

2 道長

3 宮(彰子)

4 母(倫子)

5 宰相の中将(兼隆)

(G) ——— 線部(7)について。どのようなことを「聞きにくし」と思ったというのか。その内容について述べている一続きの表現を十字以内で文中から抜き出して答えよ。ただし句読点は含まない。

(H) ——— 線部(8)の解釈として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 見送りをしない

2 人に劣りはしない

3 贈り物をしない

4 世話をしない

5 お返しをしない

(I) ——— 線部(9)の現代語訳を五字以内で記せ。ただし、句読点は含まない。

(J) ——— 線部(10)の現代語訳として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 才知がある

2 恐れ多い

3 立派である

4 運がよい

5 大事である

(K) ——— 線部(イ)・(ロ)はそれぞれ誰に対する敬意を表しているか。次の中から最も適当なものを一つずつ選び、それぞれ番号で答えよ。ただし、同じ番号を二度用いてもよい。

1 若宮

2 道長

3 宮(彰子)

4 母(倫子)

5 宰相の中将(兼隆)

(L) ——— 線部の文法上の説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 断定

2 伝聞

3 推定

4 完了

5 過去